

竹内宏著「^{けいざいがく}経済学の^{わす}忘れもの」日経プレミアシリーズ、日本経済新聞出版社、2013年2月22日刊を読む

「経済学の忘れもの－日本の未来」

1. 失われた忍耐力

- (1) 日本企業は、先端技術製品でも台湾や韓国に負け、間もなく中国にも敗れそうだ。それは、個人の力が弱くなったからだ。
- (2) プロテスタントが生まれたドイツでは職業を「ベルーフ」といい、それは「神から命ぜられた」という意味だ。モーツァルトは、あたかも神から名曲を人類に送ることを命ぜられたかのように、5歳から作曲して700の名曲をつくり、35歳の若さで亡くなった。天才の場合は、神が彼を呼び、彼は命ぜられた仕事に人生を賭けるのである。
- (3) しかし、普通の人には神から呼ばれないから、何かのきっかけ(例えば、入社試験にパス)で、偶然、始めた仕事を宿命と覚悟して、一生をかけて技能を磨くものだ。天才でない限り、「自分探し」によって職業をみつけようとしても、みつかるはずがない。
- (4) 豊かな社会になり、仕事の種類が、単なる物づくりから、情報と結合した物づくりや情報の創造に広がると、どこかに自分の能力や趣味に適した仕事があるはずだと思うようになる。確かにそうではあるが、普通の人には、1つの仕事に就いて10年ぐらい働いてから適否がわかるものだ。仮に適していなくても、そのときには一人前の技術を身につけているので、生活できる。私たちが若いときには、それが分に応じた人生だと悟って働いた。貧しかったので、そうしなければ食えなかったのだ。
- (5) 現在、高卒・大卒・大学院卒ともに就職難に悩んでいる。一方、中小企業では新卒者が採用できないので、存立の危機に立っている企業が多い。それは、多くの若者が大企業を狙っているからだ。
- (6) しかし大企業の多くも、もともとは零細企業だった。社長や従業員が人生を賭けて工夫し、長時間労働に耐えて働き続けた結果、企業が発展して、従業員は安定した生活を送れるようになった。大企業に勤めようとする人は、その成果だけを手に入れ、安住しようというわけだ。こういう従業員が多くなった大企業は倒産する。
- (7) そもそも新入社員は、基礎訓練のため数年間、定型的な仕事を与えられ、その段階では当然個性を生かせない。ところが、それに耐えられず、仕事が合わないと判断して退職し、新たに「自分探し」をする人が少なくない。そういう若者が増えた結果、日本は生産技術や新製品の開発力で、台湾や韓国に敗れたといえよう。

2. 大災害によるイエの再発見

- (1) 現在の日本は、幕末と同じような危機にある。経済力が衰退し、国民が退嬰的になっている。日本の立地条件は、米・中の両軍事大国が対決する最前線にあり、列強に挟まれた、かつての中東の大国と同じような危険な状況に置かれている。中国や韓国は領土問題で弱くなった日本を攻め、国民の反日感情を煽っている。中国は、尖閣列島で一戦をも辞さない覚悟だ。
- (2) その上、東日本大震災に襲われ、原発問題が発生している。日本は大地震の発生周期に入ったようであるから、大津波対策が急がれる。また原発廃止運動が高まっており、もし廃止す

ると、エネルギー価格が非常に高くなる上、天然ガスや石油の輸入額が激増して、貿易収支の赤字が拡大し、日本経済は弱くなる。日本は危機を乗り越えられるだろうか。

- (3) 振り返ると、ペリーが 3 隻の軍艦を率いて通商を求めて浦賀に現れた 15 年後には、明治政府が成立していた。経済力も、軍事力も圧倒的に弱いという日本の危機が、多数の志士や西郷隆盛のような大政治家を生み、近代国家の日本をつくった。危機が国を変えるものだ。
- (4) 東日本大震災については、現在では、民主党政治における危機対応力の欠如、原子カムの閉鎖制などの問題点が指摘されているが、震災発生直後には、日本人の忍耐力、危機対応力、団結力が発揮され、日本の強さを実感できた。
- (5) 2200 カ所の避難所に集まった人たちは、肉親を失った悲しさを押し殺し、寒さや飢えを忍び、水不足や停電の生活に耐え、助け合って、きれいに片付けられた清潔な空間で、共同生活を続けた。避難所では救援物資を受け取る人は整然とした長い列をつくった。現地を訪れた外国人記者は、日本人の冷静さとモラルの高さに驚嘆した。
- (6) 新宿駅をはじめとする鉄道の拠点駅では、所狭しとボランティア集団が屯して、震災義捐金集めに声を囁らしていた。彼等は、現地へボランティア活動に行きたいが、現地に受け入れ余地がないので、やむなく募金活動に熱中したという。
- (7) オーナー企業家、タレント、プロ・スポーツ選手が争うように大金を寄付し、なかには 100 億円を寄付する人もいた。ほとんどすべての人が、勤め先の企業や属している組織で寄付をし、かつ街頭でも寄付に応じた。
- (8) 全国各地では、桜祭りも夏の花火大会も中止を決めた団体が多かった。被災者の気持ちを付度して、大型イベントはことごとく自粛であった。
- (9) 大震災直後、日本人は皆、善人になった。東京では、牛乳やヨーグルト、さらには水も不足したが、物不足に乗じ、値上げして儲けようとする店はなかった。はじめのうちこそ買い占めに走る人がいて混乱したが、そのうち、どの店も 1 人 1 本というような制限を設けながら、普段の価格で売った。人々は計画停電にも、電車の間引き運転にも、文句をいわず、不便に耐えた。
- (10) 高校野球春の甲子園大会では、満塁ホームランを打った選手は喜びを全身に現し、跳ね上がってホームインしたかったに違いない。しかし、彼は高ぶる気持ちを抑え、ホームを走り抜けたただけだった。応援団も、笛や太鼓を鳴らさず、静かに拍手するだけにとどめた。
- (11) 東北地方では、自動車部品、電子部品、特殊な素材等の工場の多くが被害を受けたので、極端な品不足に落ち込み、国内だけではなく、海外の自動車、携帯電話、建設機械等の大型工場が止まった。驚くことに、親企業、同業者、地域の関連産業、顧客企業等が協力して、半年後にはほとんどすべて被害工場は供給能力を回復し、内外の大工場の操業が戻った。東北新幹線も、50 日後には開通した。東京電力は、1 週間で 90 %、2 カ月で 99 % の地域で、停電を復旧させた。
- (12) コミュニティーが消え、助け合う心が失われ、日本は砂のような社会になったと嘆く人が多かったが、この大震災によって、実際には、黙々と困苦に耐え、黙って危機を乗り切る人が大勢いる粘土のようなイエ国家であることがわかった。戦後長らく忘れ去られていた、痛みを分かち合って国難を乗り切ろうという同胞意識を確認できた。

3. 新しいイエ宗教の創造

- (1) 日本では、リーマン・ショック以来ずっと不況が続き、実質賃金は年間 1 % ずつ低下しているが、EU やイギリスのように暴動が発生せず、社会は平穏だ。それはつぎのような要因が働いているからだ。

まず、デフレ経済の結果、生活必需品は安くなり、また、インターネットを利用すると格安商品を見つけられる。企業は可能な限り正社員の解雇を避け、非正規社員でも優秀な人を雇用し続けている。従業員は企業の経営状態を知ると、大人しく賃下げに応ずるので、実質的なワークシェアリングが働く。失業率はアメリカの半分であり、ドイツより低い。イエ企業の心は崩壊していない。若い人には簡単に会社を辞める人が多いが、貯蓄の多い親や祖父母の援助のもとで生活していける。イエ家族の心も、わずかに残っている。

- (3) 中国や韓国で反日運動が燃え上がり、広場に大衆が集まり日の丸が燃やされても、日本では両国の国旗を燃やす事件がない。日本人はイエ国家を大切に思い、下品な行動を起こさない。
- (4) 敗戦後の日本は、戦勝国のアメリカに経済的に追いつくというはっきりした目標を持ち、イエ企業宗教が機能して、急成長を遂げた。私たちは働くことに夢中であって、自分探しをする余裕も必要もなかった。現在の日本は成熟国になり、新興国に追い上げられ、所得は減っている。私たちは、つましく生活して、心の帰属先を探している。
- (5) 日本の仏教では、すべての人は努力なしに仏になれるから、僧は死者が仏になる仲立ちをするだけだ。私たちは死んだ後には近くの山にある浄土に住み、お彼岸には子孫が墓にお参りにきて声をかけてくれると思っている。お盆には、そこを抜け出して子孫の家を訪ね、集落の生者と踊り明かすのである。最近、盆踊りが一層盛んになった。死者は子孫が減ったので、日本中ならどこへでも帰り、生者も死者も風の盆や阿波踊りのような大きな踊りに集まるのである。私たちにとって死後の世界は安心だ。
- (6) しかし日本の仏教は、人生の悩みに答えたり、貧しい人を救ったりはしてくれない。生きている人には関心がないのだ。世界の強い宗教は生き方を指示してくれるが、日本では、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教におけるような神のような絶対者を欠いているのであるから、それは不可能なのだ。祖先・子孫と一体になって生きる儒教もない。
- (7) 日本の強みは、国民にイエ国家の一員であるという潜在意識があり、危機のとき、それが蘇ることである。いま必要なことは、私たちが国家の危機を感じて、新しいイエづくりをすることだ。

P.280 ~ 287

[コメント]

長銀総合研究所理事長で名著「路地裏の経済学」を執筆なさった竹内宏先生の最新著を、やっとの思いで読み終えた。経済分析と世界の巨大宗教の歴史と強靱性を結びつけ、日本経済の再建の方策を探った本書は、竹内先生の「文明論」とも言うべきだ。3年にわたる病室での執筆の御様子を思い浮かべながら、もう何度か読み直し、竹内先生から学びたい。

— 2013年5月19日 林 明夫記 —